

[平成13年度教員共同研究報告]

環境デザインの基礎理論構築に向けて

黒川 威人
角谷 修

1. はじめに

環境デザインに関する専攻（あるいは学科、コース等）が、わが国の美術系大学教育の中に登場するのは1973年のことであり¹、筑波大学芸術学群に設置された「環境デザイン」をもって嚆矢とする。国公立大学においては、この他、東京芸術大学美術学部デザイン科に環境造型デザイン講座が開設されるのが1977年。芸術工学系では、これより数年さかのぼる1968年に、九州芸術工科大学の開学と同時に環境設計学科が開設されている。爾来、環境デザインに関する学科は時を追って増え続け、本学美術工芸学部においては1996（平成8）年に開設されたが、これは本学におけるもっとも新しい専攻である。当該専攻開設にいたる歴史的経緯は、本学紀要（創立50周年記念号）において黒川が紹介したのでここでは触れないが、同年行われた産業美術学科改組、デザイン科誕生にあたって突然生まれたものではなく、短大から4年制大学への昇格が認可された1955（昭和30）年以來の長い歴史的葛藤と、備えがあって初めて誕生したものであることを述べておきたい。根底にあったのは、理想のデザイン教育環境には、モノのデザインたる生産デザインと伝達のデザインである視覚伝達デザインに加え、空間系としての環境デザイン領域が欠かせない、とする理念であった（図1参照）。平成9年には大学院美術工芸研究科に博士後期課程が開設され、ここではデザイン関連専攻は「環境造型デザイン領域」として括られたが、その意図するところは、環境デザイン専攻の理念を1歩進め、すべてのデザインは人間の環境を支配している造形物をデザインすることであるとの理念にも

とづくものであった。

しかし、そうした理念は、設置認可申請書等の文言としては存在するものの、実質的に研究や教育を推進していくための体系として確立、普遍化あるいは具体化されているかといえば、いささか心もとない。現実には、理想の人間環境をデザインするという志のもと、隣接する専門分野がそれぞれの思惑で時に関係しながらも、独自に、日々試行錯誤を行っているのが実態である。

本共同研究は、今後の教育・研究の指針を得るために、これまでの成果を踏まえながら、環境デザインに関する基礎理論の構築を目指すものである。取りあえず本年は、これまでつちかってきた環境デザイン理念の確認と、現在様々な大学で展開されつつある同様な専攻の実情を調査し、わが国大学教育における環境デザインの動向を探ることから始めることとしたい。

2. 環境デザインの概念

ここで、環境デザインとは何か、現在、我々が抱いているおおまかな概念を述べておく必要がある。きわめておおまかに定義付けるとすれば、それは「建築・都市、インテリア、ランドスケープ、環具・街具等、環境を形作る全ての要素を貫く共通の理念に基づいて行うデザイン手法」だといえる。本学が英文の際使用しているスペースデザインはこうした観点からは正しくないと思われる。空間だけをデザインしている訳ではなく、それを成り立たせている建物や道具等を総合する、あるいは関係させるという概念が不足しているからである。

建築分野からの環境デザインの草分けは仙田満氏であろうが、氏はその著書の冒頭において次のように定義している。『『環境デザイン』とは、『すでにある物語を大切にしながら設計すること』である。私は、従来の都市、地域、建築、造園、街路、インテリア、ID、プロダクト、グラフィック…といった、空間的な広がりによって定められるデザイン領域ではなく、それらを横断するデザイン領域の重要性を主張してきた。』² とあり、我々の考え方も符合する。文中の「すでにある物語を大切にしながら」のフレーズはやや分かりにくいだが、私はこれを「歴史性」や「地域性」「場所性」を大切にすることだと理解している。

かつて、東京芸術大学に環境造形デザイン講座を開設した稲次敏郎氏によれば「環境デザインは環境を構成する諸要素の相関性—『かかわり合い』のうえに存在するものである。すなわち環境は建築デザイン・屋外デザイン・インダストリアルデザイン・ビジュアルデザインなど、多くのデザイン領域が交錯し、多様に輻輳して形成される。それらデザイン諸要素をひとつの秩序の下に関連付け、構成に脈絡を与えて『まとまり』とすることに環境デザインの意義は存在する。』³と、ほぼ同様の主旨ながら、諸要素の「かかわり合い」に重点をおく。稲次氏は東京美術学校の図案科を卒業後は建築畑を歩かれた方であるが、東京芸大デザイン科に着任された時点でのスタートはインダストリアルデザイン（ID）講座であった。「ID講座の『ヒト・モノ』の言葉に加えて『ヒト・モノ・場』を大学院ゼミナールの言葉とし、『人・道具・住居の相関性（かかわり合い）』を研究テーマ」として、10年程教育・研究に従事したのち上記講座を開設されたが、デザイン畑出身の環境デザイン開拓者として評価される方である。

2.1 環境デザインの意義

ここで美術系学部（芸術専門学群）としては最も早く環境デザインコースを開設した筑波大学の例を見てみたい。同校のホームページから、環境デザインをどのようにとらえているかを、読み取ってみよう。

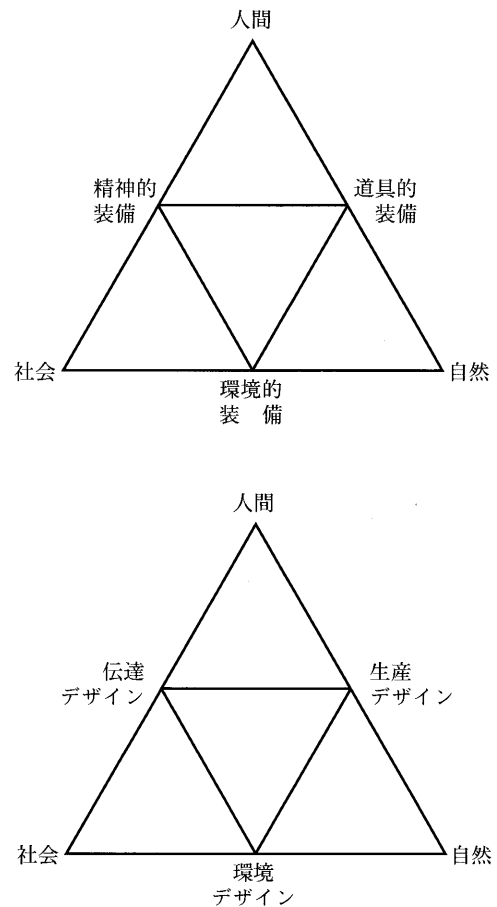


図1. デザインの世界⁴

1950年代から20世紀を支配したデザイン領域図

「（前略）人間は『環境』の産物であり、また、環境も人間の『産物』である。このような相互依存的な人間と環境との関係を明らかにし、それに応じた環境の『設計』と『計画』について学ぶことを目的としている。」とあって、「人間」対「環境」の相互関係という、より広い視野で捕らえようとしていることが理解される。その理由を次のように説明する。「私たちの身の回り、あるいは、私たちが生活している『場』は、いってみれば、スケールの違いはあれ、すべて『環境』と言えるものである。しかし、これまでのデザインの実践や学問の考え方は、それを細分化することによって成立してきた。インテリアデザイン、建築デザイン、都市デザイン、造園…といった具合に。しかし、科学技術の発展や情報化、

産業構造の変動といった現代社会の急激で大きな変化を来している昨今、このように細分化されたままでは、本来複雑で多様な私たちの『生活場』の全体像を見失う恐れがある。(中略) その具現化のため本コースでは、屋内空間(インテリア)に始まり、街路、広場、公園、地区(街区)、都市、地域(山野、湖沼・河川等の自然を含む)といったあらゆるスケールの『空間』を学習対象としている。換言すれば、『環境デザイン』は、現代における『人間回復』のための、環境づくり・空間づくり=デザインを総合的に学ぶ分野なのである。」とあって、あきらかに、細分化されたデザインの領域を再総合しようとの意図が読み取れる。特に『人間回復』のための、環境づくり・空間づくり=デザイン」というフレーズには現代文明批判が色濃くあらわれている。

2.2 社会的背景

調査を開始する前から薄々感じていたことだが、今日、環境という名を冠した学科名は非常に多岐に渡っており、中には学部名に冠した例も少なからず見られる。一部には大学名にさえ「環境」の語が使用されているが、これは一体何を意味しているのだろうか。思うに、デザインの領域において環境という概念が必要と感じられ出したと同様の現象が、あまねく大学教育・研究の場におよんでいるということに他ならないのではあるまいか。様々な研究領域の技術・理論が、細分化によって発展を続けてきたことに由来する歪みないし弊害が、地球規模での問題発生につながっているとする問題意識が背景にはあるように思われる。前節末尾で紹介した筑波大学の環境デザイン設置主旨文がその一例である。

ここで海外での動向をみてみると、このことを説明するのに格好の学会が1969年にアメリカに生まれている。環境デザイン学会(Environmental Design Research Association: EDRA)がそれである。同学会の活動の一環として1985年に出版された「環境デザイン学入門—その導入課程と展望—原題: Environmental Design Research: Directions, process and prospects」⁵によれば、同書の目的は「環境、人間の行

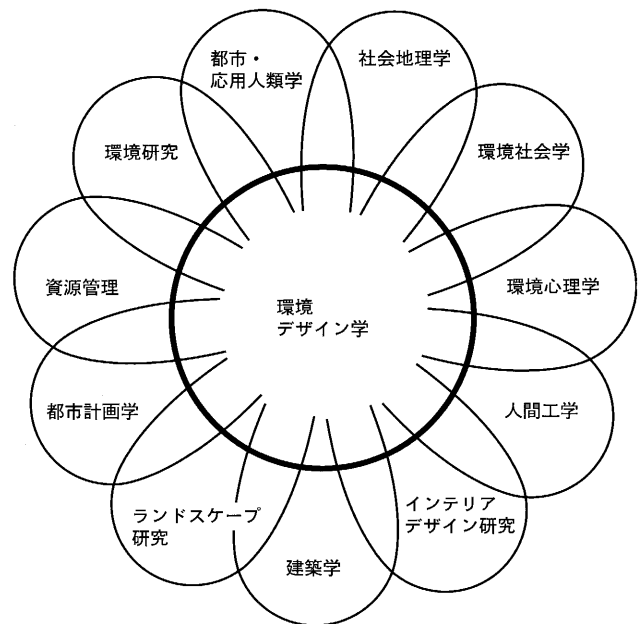


図2. 環境デザイン学の関連分野

環境デザイン学は、社会科学および環境に関わる数多くの専門分野を集合したものである。社会地理学、環境社会学、環境心理学、人間工学、インテリアデザイン、建築学、ランドスケープ、都市計画学、資源管理、環境研究、都市・応用人類学

動、そしてデザインの分野を一つにまとめ、環境デザイン学がこれから向かうべき方向と環境への適応の仕方に道を示し、これらの問題に一連の研究指針を与えることである。」とし「目の前の環境と人間の行動、またデザインの問題が、多くの場合互いに結びついているこの学際的な領域には、環境—行動学、環境心理学、あるいは環境デザイン学など、さまざまな呼び名が与えられてきた。その目指すところは、物理的環境と人間行動の相互関係を研究し、こうしてえた知識を、環境の政策、計画、デザイン、そして教育に活かしたうえで、生活の質を向上させることにある。」とあって、デザインはその一翼をになうだけという位置付けながら、科学的な立場で述べられており違和感はない。ただ我々が考えているよりも多くの専門科学を糾合していることは、多分野を横断する学際的学会故の広がりであろうかと推察される。図2は同書中、環境デザイン学の定義に使用されているものである。

なお、日本においては上記学会の影響を受けて1982年に創設された人間・環境学会があり、両者は定期的にセミナーを開催していることが知られている。今回調査において我々の想像をこえる学問分野にも「環境デザイン学科」がおかれていたことはこうした背景を物語るものであろう。

もう一度視点を足下に戻し、デザイン・ものづくりの分野に限定して日本の状況を見てみよう。建築分野では、先に述べた民間で建築設計事務所活動を行っていた仙田満氏が最も早く、九州芸術工科大学の誕生と同じ1968年に環境デザイン研究所をスタートさせている。仙田氏の場合は、子供の遊び空間を設計する現場において、建築とランドスケープとプロダクトデザイン等、様々なデザイン分野が個々バラバラに取り組んでいては理想の子供空間はデザインできないと悟ったことがその始まりであった、とされる⁶。仙田氏は現在、日本建築学会の会長（東京工業大学教授）でもあり、ここに時代の流れを読み取ることも可能であろう。

さかのぼる1960年代には別に工業デザイナーと建築家らによって「環境と工業を結ぶ会：DNIAS」が結成され、工業化一辺倒の社会に警告を発しているのが注目されるが、時期尚早であったか運動体としては長続きしていない。

ともあれ、1960年代に端を発するこうした背景から、全国の建築学科においても環境設計など、「環境」の2文字を冠したコースあるいは講座を設けることが盛んとなり今日に至っているが、日本の建築学科は東京芸大以外そのほとんどが工学部に置かれているため、美術系大学に置かれることの多いデザイン学科のなかの環境デザインとは自ずと異なる方向を示しているように思われる。今回調査では建築学科もまた内部に環境デザインコースや講座を置く例が多く見られたが、美術・デザイン系では同一学部に環境デザイン学科と並立して建築学科をおく例もすくなく見られ、ここに環境デザイン教育の特色があると考えられるため、今回は主にデザイン系学科を調査対象とすることとした。

3. 各大学の現状調査

平成13年度は国内外の数大学を訪問した。設置主旨・学科構成などは出版されている文献や大学案内等の印刷物およびインターネットホームページに掲載されているものを参照し、各大学の現状を導きだした。なお、直接視察目的で取材した大学および学内を見学した大学は9校に上るが、詳細は紙数の都合により割愛した。インターネットホームページや大学案内の文章については、主旨が損なわれないよう、原文そのままを引用している。このため文体が一定しないことをお断りしておきたい。

以下、最初に「環境デザイン学科」または極めて類似の学科名をもつ大学を、ついでデザイン学科または類似の学科の中でコースとして環境デザインをかかげる大学に絞ってみていくことにしよう。

3.1 環境デザイン学科

インターネット検索⁷で「環境デザイン学科」でサーチをかけると、現在、国内には15の環境デザイン学科（環境設計および学科組織無し各1校と、2003年4月改称のもの1校を含む）と「環境デザイン」に工学あるいは、空間が付加された、ほぼ似通ったコンセプトに基づくものと考えられる2校、あわせて17校が開設されている。これに、やや住居学に特化していると思われる「生活環境デザイン学科」および「住環境デザイン学科」各1校を加えたものが表1であり19校にのぼる。別に、都市に特化していると思われる「都市環境デザイン学科」が1校あったが、本稿では割愛した。なお美術・デザイン系でサーチをかけた場合でも「環境デザイン学科」は7校がヒットするが、内6校は工学部系とだぶっており、美術・デザイン系だけに登場するのは1校のみである。

また、美術・デザイン系には、他に空間演出デザイン学科なる名称が2校出てくるが、これらの大学には別に環境デザイン学科が開設されているので割愛する。

以下その詳細を見てゆくこととするが、興味深いのは、所属する学部名に環境が付くものが7校と3

表1 環境デザイン学科及び近似の学科一覧

学部系統	学部名	学科名	大学名
美術系	芸術専門学群環境デザイン(学部学科なし)		筑波大学
	美術学部	環境デザイン学科	多摩美術大学
	造形学部		長岡造形大学
			京都造形芸術大学
		大阪芸術大学	
芸術工学系	芸術工学部	環境設計学科	九州芸術工科大学
		生活環境デザイン学科	名古屋市立大学
	デザイン工学部	環境デザイン学科	東北芸術工科大学
			神戸芸術工科大学
理・工学系	工学部		北海道工業大学
			大阪産業大学
	環境理工学部	環境デザイン工学科	岡山大学
	国際環境工学部	環境空間デザイン学科	北九州市立大学
家政系	人間環境学部	環境デザイン学科	京都府立大学
	生活環境学部		金城学院大学
	生活科学部		山口県立大学
その他	環境情報学部		鳥取環境大
	環境学部		広島工業大学
	社会環境科学部	住環境デザイン学科	広島国際大学

分の1弱を占めることである。ひところ新設される学部・学科名に「国際」「情報」「文化」を付けることが流行したが、「環境」もまた、その一つと言えるのかも知れない。なお、上記大学では美術系が5校、理・工学部系が4校、その折衷をねらった芸術工学系が4校、家政学系が3校、その他が3校ということになる。

以下、それぞれの学系に分類した学科を見てゆくが、冒頭に<>で括った部分は各大学が当該学科のキャッチフレーズとして用いているものである。なお文章は各大学の特色を表していると思われる部分を抜粋したが、原文の文体はそのまま使用している。

3.1.1 美術系学部

美術系大学の場合は、造園・ランドスケープなど、従来のデザイン教育に欠けていたものを補い、いわば理想のデザイン教育を目指そうとの姿勢が見られる。下記の4大学が該当する。

- (1) 筑波大学芸術専門学群 環境デザインコース
教育内容の特色

都市計画・都市デザイン、造園、建築、生産デザインといったさまざまな分野に経験豊かな教官スタッフが叙上⁸のような新たな総合的視点にもとづいた方法による教育を行っている。なお、隣接して建築デザインが開設されている。2年次までは、生産デザインを含めた隣接3コースと合同で演習・実習が行なわれる。

- (2) 多摩美術大学 美術学部 環境デザイン学科
<環境という森羅万象の世界に対し五感を研ぎ澄まし、身体でもってデザインする姿勢を学びます。>

3学年からはインテリア、建築、ランドスケープ、オーバージャナルの各系から、各自の興味と適性にあった系を選択。

- (3) 長岡造形大学 造形学部 環境デザイン学科
<人と環境、進化と保存を共存させかつ発展させる>
空間デザイン系として、建築デザインコース、ランドスケープデザインコース、都市計画・まちづくりコースの3コース。環境保存系として、歴史的建造物コースと遺跡・庭園コースの2コース計5コースがある。5コースは有機的に融合している。

(4) 京都造形芸術大学 芸術学部 環境デザイン学科
くいまこそ、日本の都市は「豊かな精神」をを取り戻す必要がある。そのためには、環境デザインの3つの分野がジャンルを越えて環境をトータルに捉え、新しい時代の環境哲学を構築していかなければならない。>

環境デザインを総合的に学ぶため、3年次からコースに分かれる。建築デザイン、ランドスケープデザイン、地域デザインの3コースがある。

3.1.2 芸術工学系学部

もともと芸術と工学の融合を理想に掲げてスタートした学部だが、「建築設計」「環境設計」「技術力」などの用語に工学系の影響が感じられ、美術系よりは固い印象を受ける。下記の4大学が該当する。

(1) 東北芸術工科大学 デザイン工学部 環境デザイン学科

<多様な環境に対応する幅広いデザイン能力を育成>
建築設計/環境計画

本学科が追及する環境デザインは、もともとは建築、土木、都市計画、造園などの技術に基礎をおき、(中略)さらに複雑化、高度化する社会のニーズに応えるために、これらの伝統的な技術を総合化し、発展させた技術体系です。

(2) 神戸芸術工科大学 造形学部 環境デザイン学科
<建築・ランドスケープ・まちづくり、生活の舞台をトータルに学ぶ。>

環境デザイン学科では、(中略)室内から都市・地域さらには自然環境にまたがる環境全般に対して、建築、都市、ランドスケープを中心にしながら総合的なデザインを学びます。

(3) 九州芸術工科大学

環境設計学科 Department of Environmental Design
<教育の目標 環境設計学科の教育は、(中略)「設計」という最も総合的で実践的な活動を教育の中心に置き、人間と環境に係わる幅広い知識の総合化を目指すとともに、常に野外に出て複雑な現実の生活環境に接することにより、「環境」に対する確かな判断力と鋭い洞察力を養い、豊かな創造の能力を有する人材を養成することを目標とする。>

(4) 名古屋市立大学 芸術工学部 生活環境デザイン学科

<芸術工学とは何か…芸術と工学の融合を目指し感性・技術力・人間理解の3つをバランスよく備えた設計家《総合デザイナー》を育成する。>

家具や車椅子の道具レベルから建築レベルまで、生活を取り巻く環境のデザインを学び、人間と生活環境を幅広く関連させて快適な環境を計画設計できる人材を育成する。

道具レベルのプレ建築環境デザイン系と建築レベルのメタ建築環境デザイン系の2つの履修モデルが設定される。

3.1.3 理・工学系学部

理・工学系の場合は、従来の学部の固いイメージを脱却するかのように「自然科学と社会科学の融合」や「自然と人間が調和した環境」などの表現がみられる。いわゆる「環境問題」を得意とするが、大阪産業大学のみは美術系に近い内容である。

(1) 北海道工業大学 工学部 環境デザイン学科

<環境デザイン学科は今日多様に発生している環境問題に的確に対応するために、自然科学と社会科学を融合した新しい学問領域の学科です。自然環境評価分野(大気や水の評価、動植物の生育環境の分析)、自然環境計画分野(近自然河川計画、森・ビオトープづくり)、社会環境評価分野(コミュニティ、子ども・高齢者環境の分析)、生活環境計画分野(景観形成、まちづくり)の4つの柱で地域の自然を大切にしながら心豊かな暮らしを実現するための専門知識を習得します。(以下略)>

(2) 大阪産業大学 工学部 環境デザイン学科

環境デザイン学科には、都市や地域など屋外環境のデザインを扱う《シビックデザイン》、建築物とインテリア全般の技術を意匠に重点をおいて学ぶ《建築・インテリアデザイン》、陶芸・織物・メタル工芸・照明器具など単体のクラフト製品を扱う《クラフトデザイン》の3コースがあり、どのコースでも、人と物との関係を基軸とする環境デザインを学びます。

(3) 岡山大学 環境理工学部 環境デザイン工学科
 <環境問題が人類の生存を脅かすまでに深刻化した今、自然と人間が調和した環境づくりは、人類最大の課題となっています。環境デザイン工学科は地球全体を視野にいれながら、未来を拓く豊かな環境づくりに挑戦します。>

(中略) 環境デザイン工学科は、気圏・水圏・地圏、都市・地域、並びに道路・橋・河川等の自然・人工物を対象として、豊かさと環境との調和した社会形成のための技術について、教育・研究をしています。環境評価学、環境計画学、環境設計学の3大講座で構成されています。

(4) 北九州市立大学 国際環境工学部 環境空間デザイン学科

<環境空間デザイン学科では、環境保全工学*や資源循環学*、エネルギーシステム*などを学ぶ。そして、生態系に調和し、環境に配慮した建築・都市空間をデザインする力を養う。>

上記*印3講座の他空間システムデザイン、環境経営システム、国際環境の計6講座がある。

3.1.4 家政系学部

家政系の特徴は「衣服」「食物」「アパレル」「コスチューム」など、他の学部系には見られない身近なキーワードが見られることである。以下の3大学がある。

(1) 京都府立大学 人間環境学部 環境デザイン学科
 <(前略) 環境とは私たちをとりまくすべてのものです。衣服、食物、食器、家具、電化製品から室内空間、建築、街路、都市まで大小さまざまな物が環境を構成しています。さらに、目に見えない制度、システム—たとえば生活様式とか教育制度といったものも、環境を構成しています。その環境を「デザインする」とは、どんなことでしょうか？(中略) 全体として環境を改善することこそが「デザイン」なのです。>

(2) 金城学院大学 生活環境学部 環境デザイン学科
 <すべての人にやさしいものづくりを「アパレル」「住居」「エコ」の3領域で追求します。>

環境デザイン学科では次の3領域でユニバーサルデザインを追求します。

アパレルデザインコース、住居・インテリアコース、エコロジカルデザインコース

(3) 山口県立大学 生活科学部 環境デザイン学科
 <幅広いデザイン行為のなかで、造形性、生産性、社会性に配慮しつつ、デザインの新しい哲学とあるべき姿を創造する能力を養成します。>

内容はED、AD、UD、プロダクト、ビジュアル、コスチューム、フォーメイティブアート、トポロジーと幅広い。

3.1.5 その他の学部系

いずれも比較的近年設置された大学であり、コンセプトも「環境共生建築」「環境科学」「環境情報」など、従来の大学にはなかった切口をみせている。

(1) 鳥取環境大学 環境情報学部 環境デザイン学科
 <自然と調和し、環境に負荷の少ない居住空間・建築の設計やデザイン、都市・地域計画などの専門知識と技術を身につけます。>

(前略) 本学科では、住居・建築、都市・地域、インテリア・家具、エクステリア・庭園など人間活動環境のあり方と構築技術の探求及びその適正なデザインを迫ります。その中で環境共生建築、木造建築の構造・構法、歴史的建築の修復・再生、家具・インテリアのアメニティ、循環型地域構造など人間居住と環境に関わる諸テーマを教育研究の中心とし、自然と調和した快適な居住環境の計画・設計、施工・管理や地域づくりなど幅広い分野で環境デザインを担う人材を養成します。

(2) 広島工業大学 環境学部 環境デザイン学科
 <「環境」という視点から居住環境を創造する力を育成します。>

「環境」という視点から、インテリア、建築物、都市などを見つめ直し、人にとって望ましく、環境負荷の小さい居住環境を創造するのが環境デザインです。

カリキュラムは、「居住環境」分野の科目を主としながら、これと相補関係にある自然環境ほかの「環境科学」分野および「環境情報」分野の科目をプラス。(中略)学生は、(中略)建築を主対象とするデザイナー、プランナー、コーディネーターなどをめざします。

(3) 広島国際大学 社会環境科学部 住環境デザイン学科

<現代のさまざまな環境問題を学び、次世代の快適な住環境づくりを科学する。>

住環境デザイン学科では、優れた生活空間を創作するための設計やデザインについての知識・技術を磨き、次世代の快適な住環境づくりを教育・研究します。住環境と自然との調和、住環境とインテリアデザイン、高齢社会でのバリアフリーな環境の創造、住環境中の環境ホルモン問題やシックビル症候群の問題、自然災害に対する防災科学など、環境問題を中心に幅広く学習できる教育課程となっています。(中略)居住環境系、環境デザイン系、環境計画系、福祉環境系、環境情報系、建築・構造系の6つの系と関連科目、住環境デザインフィールドワークからなる専門科目によって編成しています。

3.2 デザイン科および類似学科における環境デザイン専攻(コース)

3.2.1 美術系大学(学部)

下記5校のデザイン科には内に環境デザインの呼称がついたコースがある。東京造形大の場合は環境デザインの中に建築コースのあるのが目を惹く。なお、金沢美大の場合は入試時点からコースが別れており、学科とみなすことが出来る。

- (1) 金沢美術工芸大学 美術工芸学部 デザイン科 環境デザイン専攻
- (2) 京都市立芸術大学 美術学部 デザイン科 環境デザイン専攻
- (3) 女子美術大学 美術学部 デザイン科 エンヴァイロメントデザインコース
- (4) 東京造形大学 造形学部 デザイン学科 環境計画専攻 環境デザイン、建築コース、室

内建築コース、都市環境コース、環境造形コース
(5) 宝塚造形芸術大学 造形学部 産業デザイン学科 環境トータルデザイン

3.2.2 工学系大学

千葉大学の例で見ると「対象領域は、音響・映像・照明計画、空間演出計画、家具・室内計画、内外環境計画など多様で幅広く、それらを常に総合的な視点から出発させることを基本姿勢としています。」とあるように、工学として関わりうるあらゆる領域を包含している。

- (1) 千葉大学工学部 デザイン工学科 環境デザイン講座
- (2) 拓殖大学工学部 工業デザイン学科 環境デザイン分野
- (3) 近畿大学九州工学部 産業デザイン学科 環境デザインコース

3.2.3 その他の学部系

メディア造形は時代を感じさせる新しい学部だが、こうした学部にも環境デザイン類似のコースが設置されるということは、さらなるジャンルの広がりを予測させる。

- (1) 名古屋学芸大学 メディア造形学部 デザイン学科 環境空間コース

3.3 空間(スペース)デザインの呼称を持つ学科・コース(全ての学部)

時に環境デザインと同義に使われる空間(またはスペース)デザインだが、広く下記9学部で使用されている。このうち京都造形芸大、多摩美大、大阪芸大、東北芸工大の4大学では同じ学部に環境デザイン学科を持っているのが注目される。

- (1) 名古屋芸術大学 デザイン学科 プロダクト&スペースブロック スペースデザイン
- (2) 愛知県立芸術大学 美術学部 デザイン・工芸科 スペースデザイン教室
- (3) 東亜大学 デザイン学部 デザイン学科 立体・空間デザインコース

- (4) 京都造形芸術大学 芸術学部 空間演出デザイン学科 空間デザインコース
- (5) 多摩美術大学 芸術学部 デザイン学科 スペースデザイン分野
- (6) 大阪芸術大学 芸術学部 デザイン学科 スペースデザインコース
- (7) 九州産業大学 デザイン学科 人間環境デザインコース スペース、ユニバーサルクラス
- (8) 北海道東海大学 芸術工学部 デザイン学科 空間デザインコース
- (9) 東北芸術工科大学 デザイン工学部 生産デザイン学科 スペースデザイン

4. まとめ

4.1 キーワードに見る環境デザイン教育の内容

各大学の設置主旨から環境デザインの内容を示すと考えられるキーワードの内、出現頻度の高いものは順に下記の通りである。

- 1) ランドスケープデザイン 2) 建築デザイン
- 3) 都市計画・まちづくり 4) インテリアデザイン
- 5) エコロジー

ちなみにその他のキーワードは次の通りである。

シビックデザイン、建築、建築設計／建築計画、建築デザイン、Architectural Design、住居、居住環境、建築・庭園、遺跡・庭園、文化財建造物、都市計画・まちづくり、まちづくり、都市・公園、Urban Design、ランドスケープ、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、建築インテリアデザイン、住環境学、生活デザイン、生態分野、エコロジー、環境科学、環境情報、Environmental Design、アパレル、Costume Design、クラフトデザイン、Product Design、Visual Design、Formative Art、Topology。

4.2 建築系学科との比較

これについては、普段よく発せられる質問でもあるので、直接この項目を設けて説明している京都府立大学の例を見てみよう。「住環境学専攻は、勉強する内容も、就職先も、工学部の建築系学科と共通

していることが沢山あります。しかし住環境学専攻では、人々の生活を大切にする教育を徹底し、子どもからお年寄りまで、全ての人にとって住みやすい住宅・建物・まちづくりや、使い手の立場に立った建物づくりを専門家として追求する点により重点をおくところに特色があります。」

本学の場合は最近の大学案内でつぎのようにのべている。「本学環境デザイン専攻は美術系大学として造形力や色彩、アートに関する感性を磨き高めることを基本としている。」これは、それぞれの学科あるいはコースがどのような学部属しているかで、それぞれ特色が出ているということであり、求めるのは人間の理想環境であるにせよ、その方法論は幾通りもあるということであろう。卒業後取得できる資格にしても、建築学科と同等のものから、2級建築士の受験資格に限定されるもの、インテリアプランナーその他の建築士以外の様々な受験資格を取得できるものが見られる。

4.3 他大学調査から見る環境デザインの特徴

以上の結果を総合的に比較検討した結果、以下のようなことが明らかとなった。

- (1) インテリアからランドスケープ、都市・建築を包含したものがもっとも多く、デザインの対象とする範囲が広いこと。
- (2) 工学系と社会学系などいくつかの従来の領域を横断する構成が多く見られること。
- (3) 別に建築学科を置く場合と、環境デザインの中に建築（デザイン）を取り込んでいる例がみられること。
- (4) 理・工学系では主体が建築系である場合と土木系である場合、さらに環境科学など理学系である場合がある。

エコロジカルデザインに強いのは農学系や理学系を母体とするもので、ビオトープなどこれまでデザイン学科や建築学科にはなかった分野を得意とする。

- (5) 家政学・住居学系から発展したものがある。バリアフリーなどを特徴とするのはこの系統が多い。
- (6) 美術系では学年の途中までは隣接分野と共通で

授業を行う例がしばしば見られる。これは造形・ものづくりに重点を置く故だと考えられる。

- (7) 生産デザインのなかにスペースデザインがある場合がある。また逆にクラフトなど製品デザインの要素を環境デザインに取り込む例が見られるなど、領域の線引きに一部混乱が見られる。

5. おわりに（今後の展望）

以上、駆け足で全国の大学における環境デザインの設置状況と内容のあらましを見てきた。いずれも20世紀の工業化ないし近代化がもたらした専門細分化等による歪みを修復し、より人間的な環境を回復するという目的で設置されたものの多いことに気付く。

これらを語る時必ず登場するまちづくりやランドスケープ、エコロジー等の内容が組み込まれることが多いのも特徴である。さらに、近代化が置き去りにした地域性や地方性との関係を再構築する意図の見えるものも少なからず見られる。

以上、それぞれの大学の立地条件や所属学部によって、あるいは前身がどのような学科であったかによって、それぞれ少しずつ内容を異にしながらも、それぞれの大学が目指すものは、結果的に「日本型理想のデザイン教育」の構築という共通の理念を形成しつつあるとはいえないか。しかしながら、そのジャンルは、今日に到るまで拡大を続けており、その領域と理念はまだまだ流動的であるといわざるを得ない。

最後に、これまで調査した大学の環境デザイン学科設立主旨の中から、目につく論旨を拾い上げ、今回調査を締めくくりたい。

「日本の町並み、住環境は決して世界に誇れるものではない。経済大国といわれながら、なぜそうなったのか。その原因は何よりもまず、戦後日本の経済性、機能性優先主義にあったといわざるを得ないだろう。もともとは地域に根ざした美しい景観をもつ町が少なくなかったが、戦後復興の課程で、機能的、経済的で、安全な町をつくらうという価値観が優先され、工学的に都市を再構築していった。一方で、デザインの教育が細分化されてきたことも大きな要

因である。建築、ランドスケープ、都市計画の専門家は、他分野を学ばずに専門領域に閉じこもってしまい、大学ではものづくりよりも研究が重視され、創造的なデザイン教育はなおざりにされた。こうしたさまざまな要因が重なりあい、日本の町づくりは美や文化とはかけ離れたものになってしまった。（中略）いまこそ、日本の都市は『豊かな精神』を取り戻す必要がある。そのためには、環境デザインの全ての分野がジャンルを越えて環境をトータルにとらえ、新しい時代の環境哲学を構築していかねばならない。そして工学的発想からだけでなく、芸術、哲学、歴史、文学など文化の視点に立って、精神的に豊かな空間づくりをめざす必要がある。」⁹

なお、調査は未だ緒についたばかりであり、今後2～3年は継続して、データを収集するとともに、我々自身の思索も深めていくことが求められる。

注・参考文献

- 1) 実際の開設は1975年。
- 2) 仙田 満 『環境デザインの手法』、彰国社、1998
- 3) 稲次敏郎 『環境デザインの歴史展望』、山海堂、1996
- 4) 川添 登 『デザイン論』、東海大学出版会、1979を参考に作成。
- 5) G.T.ムーア他著 小林正美監訳、三浦研訳 『環境デザイン学入門—その導入過程と展望』、鹿島出版会、1997
- 6) 仙田 満 『あそび環境のデザイン』鹿島出版会、1998
- 7) <http://www.lion-kikaku.co.jp/top.html>
- 8) 2頁2-1後半に紹介した設置主旨文を受けて記述している。
- 9) <http://www.kyoto-art.ac.jp/college/geijutsu/kankyoto/top.html>

（くろかわ・たけと 環境デザイン）

（かどや・おさむ 環境デザイン）

（2002年10月31日受理）